

■はじめに 本書のねらい

映画は、どんな時代を生きているのかについて知るためのテキストとして有効です。映画で時代を読む、ということです。その際、あるテーマに着目して全体をながめるという方法があります。あえて言うなら、天井に小さい穴を開けて、そこから部屋の全体を俯瞰ふかんするということです。戦争という穴を開けて、映画は戦争をどう語ってきたか、人種という穴を開けて、映画は人種差別をどう語ってきたか等々、ひとつのテーマを追いかけることをととして、過去を知り、現在の課題と格闘し、未来のあるべき姿をイメージしていくのです。

筆者の場合は、映画は障害者をどう語ってきたか、ということになります。それは、映画で障害者問題の解決の行方を考察する営みです。

*

さて、2007年4月1日をもって特殊教育が特別支援教育へ移行しました。それは単なる名称の変更ではなく、対象枠の拡大や新しいシステムの構築を伴うものでした。

特殊教育の対象は、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、病弱、情緒障害、言語障害でしたが、特別支援教育では、通常学級で学ぶLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症等も特別な教育的支援の対象になりました。

それは「場」から「ニーズ」への転換も意味していました。すなわち、これまでの特殊教育は、障害があることによって特殊学校や特殊学級という特別な「場」に在籍する児童生徒をその対象としていたのですが、特別支援教育は、対象を通常学級における特別な教育的ニーズのある児童生徒にまで広げたのです。これは小中学校に留まるものではなく、幼稚園や高等学校にまでおよぶものです。

対象枠を拡大した以上、このことに対応する新しいシステムを構築せざるをえません。それは、特別支援教育支援員の配置と拡充という歓迎すべき動きはあったにせよ、主に現有資源の有効活用というアイデアによって推進されることになりました。換言すれば、日本の教師の精神性の高さや卓越性に依拠して推進することになったのです。

第1に、各校において、校長が特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）を指名し、特別支援教育を推進・調整するキーパーソンを明確にしたのです。

第2に、特別支援学校にセンター的機能としての役割をもたせたことです。すなわち、特別支援学校に小・中学校等の教員への支援機能や、幼児児童生徒への指導・支援機能等が求められることになったのです。

特別支援学校におけるコーディネーターは、専門家チームや巡回相談などセンター的機能に位置づくものですが、通常学校のコーディネーターは、校内コーディネーターとして、校内の関係者や関係機関との連絡調整、保護者に対する相談窓口、担任への支援、巡回相談や専門家チームとの連携、校内委員会で推進役など、もっぱら校内のコーディネートを主な業務とします。

また、地域によっては、校内コーディネーター全体を統括する地域コーディネーターを専門家チームに位置づけ、当該地域の校内コーディネーターや学級担任、保護者の支援に当たっています。筆者も中学校教員として2003年から2009年にかけて、2つの地域でその任につきました。それ以降も、地域の専門家チームの一員、かつ大学教員として、地域の枠を越えて飛び込み相談などに応じています。

コーディネーターと一口に言っても、特別支援学校のコーディネーター、地域コーディネーター、校内コーディネーターと3つのレベルがあるのですが、どのレベルにおいても問われるのはキーパーソンとしての実践力量です。

なかでも地域コーディネーターは、実践経験や専門的な知見、学校や地域事情の把握などにおいて相対的に優れたものを有しているがゆえに、その任

についているのであり、高い実践力量が期待されています。平易な言葉で表現するなら、地域における「困ったときの駆け込み寺」としての機能が期待されているのです。

さて、筆者は、地域コーディネーターとして、地域における「困ったときの駆け込み寺」になるべく努力してきたのですが、そんな筆者の日々の営みを支えていたのは、子どもの頃から親しんでいた多くの映画です。映画で得た素養、あるいは映画的イメージが特別支援教育教員やコーディネーターの仕事の創造につながったのです。端的に言えば、映画を仕事に引き寄せたということです。

*

前置きが長くなりました。

本書は、筆者の経験を土台として、映画を特別支援教育の仕事に役立たせようという試みです。

本書のねらいは、映画がもたらす以下2点の効果を、読み手のみなさんと共有することです。

- ①映画で特別支援教育の精神を養うことができる。
- ②映画で特別支援教育の基礎的知識習得の扉を開けることができる。

筆者は、大学で特別支援教育関連科目を担当し、教職をめざす学生の指導に当たっています。その際、映画を素材とすることによって、認識の共有がより容易になりました。本書が授業やゼミのサブテキスト、ガイドブックとして役立つ機会があればと願っています。

さて、4年前の拙著『映画で学ぶ特別支援教育』（全障研出版部、2011）に対して、真っ先に感想文を寄せてくれたのは高校生でした。筆者は高校生にも読んでもらいたいと密かに願っていたので、その日は、まさに「我が意を得たり」の気分には酔いしました。

以下、高校生Nさんの感想文です。

高校三年生の私は、これまで学校という場所に12年間通ったことになる。母校、と聞いて思い浮かべる校舎は3つもあり、これまでの担任の先生を挙げていくと8人になる。お互いの身長をミリ単位まで知っていたような友だちから、顔も知らず廊下ですれ違うだけの子まで、一体いままで何人の子と同じ時間・場所を共有してきたのだろう。

学校は嫌いではないけれど、いつも少しはらはらする。雰囲気を察知するのが苦手なあの子や思い込みで前のめりになりがちなあの子は大丈夫だろうかとこっそりクラスを見渡してしまうし、提出物の期限がおかしいほど守れない自分自身にもうんざりする。

これまで私にとって学校とは誰もが得意や不得意と付き合いながら生活している場所だった。今回『映画で学ぶ特別支援教育』を読み、普通の学生という立場での日常とは違う世の中の様々な「場」を窺い知ることができた。また、感覚的にぼんやりとわかっているつもりだった自閉症やADHDなどの発達障害とはどのようなものなのか初めて言葉で知ることができ、うれしかった。

私でも名前を知っている有名なものから、思わず作品名をメモしてしまったものまで、この本には本当に数多くの映画が登場する。実際にこれから映画を見て、またこの本を読むと、もっと多くの発見があるのだろうと思う。そうやって繰り返していくなかで「イン・ハー・シューズ」のマギーが自己肯定感をもつことができたように、私もまわりのさまざまな人とよい関係を築いたり自分自身を知ることにつなげていきたい。

この感想からも先に掲げた2点の効果（「特別支援教育の精神を養う」「特別支援教育の基礎的知識習得の扉を開ける」）を抽出することができます。このような幾多の反響に後押しされて本書が生まれたのです。

特別支援教育をはじめとする教職をめざす方や、すでに仕事に就いている方、福祉・医療・労働等、さまざまな分野の専門職をめざす方やすでに仕事

に就いている方、障害のある方、保護者・家族の方、映画で時代や問題を読み解くというテーマに関心を寄せるすべての方にお読みいただければと願っています。

二通論

※注意点

本書はR18作品など、過激な性描写、暴力描写を組み込んだ作品も取り上げています。たとえば、ある学生は「赤い天使」における野戦病院の手術シーンがリアル過ぎて耐えられなかったと語っています。「恋の罪」も途中で鑑賞を止めた学生がいます。性描写のせいです。となれば「愛の渦」や「愛のコリーダ2000」の性描写についても正視できないという方がおられるでしょう。

本書は万人向きの映画を紹介しているわけではありません。鑑賞については、鑑賞者の年齢や性質を考慮したうえで判断してください。

参考までに映倫審査の基準を紹介しておきます。

G：General Audience（すべての観客）の略。

年齢にかかわらず誰でも見られる。

PG12：Parental Guidance（親の指導）の略。

12歳未満は保護者の助言、指導が必要。

R15+：Restricted（観覧制限）の略。

15歳以上は見られる。

R18+：18歳以上は見られる。